

## 第四章 家族のこと

## 良縁の譜

初恋の相手は幼稚園の先生。真偽のほどは定かでないが、敏生は先生のお気に入りに抱かれて、ほっぺにキスされた心地よさに、敏生は「参ってしまった」のだと言う。恋の目覚めが早すぎたせいか、大学を卒業する頃になっても敏生にはまだこれといった相手がいなかった。

戦後のあの時代。学生はまだ素朴で、学校に通うのも白いズック。革靴をはけばじろじろと見られるような雰囲気の中で、色恋沙汰などもってのほか。女学生を見ても恥ずかしさが先に立って、ぎこちなくなる。これは何も敏生に限ったことではないが、大学時代を書物に囲まれて過ごした彼には、異性と付き合う機会もほとんどなくて、若い情熱はずっと胸の奥に秘められたままだった。

そんな彼にもようやく春が来る。友人の紹介で知り合った女性は静宜学院の卒業生。語学、とくに日本語が達者で、敏生は好感をもった。東大を卒業した彼女の父親も敏生を気に入ってくれて、「娘の相手はこの男」と心に決めていたようだが、いかんせん当の娘の方にはその気がなく、手紙でやりわりと断わってきた。断わられた敏生の心中は察してあまりある。やりきれない気持で鬱々とした日々を過ごすはめになった。

半年後、見るに見かねた友人がまた紹介役を買って出る。今度の相手は李秀卿。台大法科の後輩に当たる。

彼女のほがらかな笑顔に救われた。と敏生はこの時の印象を語る。心中のもやもやは雲散霧消。いわゆる一目惚れだった。

その日は紹介者の付き添いで、映画を見て夜遅く帰った。何という満ち足りた気分。あの時の胸の高鳴りを、敏生はまだ覚えていてる。

ところがその後の展開は、まったくの一人相撲。手紙で映画に誘ってみたが、只の一度も来てくれたことがない。手紙では埒があかないと、彼女がそのころ中学校の教師をしていた淡水に。はやる気持の敏生は、一時間も汽車にゆられて彼女を訪ねる。結果は門前払い。「林という男が来たら留守だと言っておいて。」宿舎の管理人にことづけとは、何ともつれない仕打ちである。

つれない仕打ちはつれない手紙でピリオドを打った。留学するというのである。

この秀卿小姐、のちの敏生夫人は、当時のことを振り返って、「恋への憧れがまだあったから」という。つまり敏生は、白馬の王子にはなれなかったということだ。

二年があっけなく過ぎた。弁護士の彼にこの方面の機会はいくらもあつたが、心になつた人はなかなか現われなかつた。そんなある日、梁基恩弁護士から便りが届く。この梁弁護士は敏生夫婦の結びの神になるのだが、それは後の話。李秀卿が留学試験に合格したというのである。「やはり行ってしまうのか。」と、あきらめはしていたものの、今さらながらに感慨がこみあげて、祝福の気持を込めて葉書を出した。が、これにも杳として返事がない。

しかしそれから間もないある日のこと、敏生の留守中に李秀卿が事務所に訪ねてきた。「留守中に李小姐が来た。」同僚の一言で敏生は直感した。それにしても突然の出来事だ。理由はこうである。彼女の出国には、彼女の父親が勤める台中省政府の許可が必要だったが、それが予期に反してなかなか下りない。ただ待っているのも時間のむだと、父親の勧めで簡単な働き口を探すことになったのは良いが、彼女のような南部出身者が台北の学校を出た場合、もともとたいした人脈がないため、就職

は難しい。そこで思いついたのが、すでに開業もしている林敏生だったのである。用件はつまり就職の斡旋。

それはともかくと敏生は、久しぶりの再会を祝して、当時重慶南路で最高級の四川料理店に彼女を誘った。

意思が固まっていることはすぐに見て取れた。「彼女は羽を広げて飛び立とうとする鳥。好きでもここはぐつと堪えて、きつぱり男らしくあきらめよう。思い入れが深ければ、去った後に未練が残る。ただ友人として、できる限りの援助はしよう。」と、自分に言い聞かせる敏生であった。

しかし肝心の就職の斡旋はしなかった。自分で雇ってしまったからである。仕事は訴状の作成。毎週三回、事務所に来て訴状を持ち帰り、出来たものを持ってくる。自宅勤務であった。「あの訴状じやはつきり言って使い物にならない。手直しするより、最初から自分で書いた方が、よっぽど早かった。」と敏生は述懐する。無理もない。学校を出たばかりで法律実務の経験などまったくなかったのだから。敏生はこの時すでに五年のキャリアをもっていた。

出国手続が完了するまでの二ヶ月間。李秀卿はこうして敏生の厄介になるが、再会のあの日以外に、一緒に食事をしたこともなければ、映画を見に行ったこともない。

彼女は高雄へ帰郷。これが見納め縁の切れ目だと、敏生はそう思った。

それから一、二週間後、教育召集令が届いて中壢に、一ヶ月の訓練を受けることになった。法律業務はこの頃すでに大変な忙しさだったが、こればかりは仕方がない。後のことは人に託して慌ただしく訓練地に向かった。

訓練が始まって一週間目。台北の事務所から李秀卿の手紙が転送されてきた。台北で世話になった

ことへの礼状だが、留学を前に何やら恋々たるものが生じたような、そんな文面に、敏生は狂喜した。説明は要らない。つまり秀卿も敏生を憎からず思いはじめていたのである。軍営にある敏生。台湾の北と南に離ればなれの二人。しかも秀卿の留学はもうすべてお膳立てが整っている。だが敏生はめげない。秀卿の「心変わり」に、ここぞとばかり奮い立った。夜の娯楽には義理を欠き、軍営の仲間を謝絶しても、敏生にはやることがあったのだ。自室に一人こもって彼は、ロマンチックな煙をくゆらせながら彼女に思いのたけを綴った。こうして一通また一通と、速達が軍営を発する。とぼちちは配達係。「また林敏生のやつか！」と怒鳴られたこともある。

手紙のやりとりを重ねて二週間目。「たばこは少なめに」。彼女の手紙に情のこもった文句を見つけて「その気になった」と、敏生はそう解釈した。一週間後、訓練は終わったが、台北には帰らず、そのまま高雄行きの汽車に飛び乗った。午後三時、秀卿の実家に到着。本人は美容院に行つて不在。「愛する人のために身繕い」か、などと敏生は心中まんざらでもない。秀卿の父は留日の画家。がっちりとした身体つきに厳肅な言葉づかい。古武士のような風格があった。母親のほうは対照的に、どこまでもやさしい心づかいの人であった。二人とも敏生の真の来意を知らない。台北で娘が世話になった林弁護士が来たものと了解している。留学を控えた娘をさらいに来たなどは、夢にも思わなかったのである。

秀卿は四時ごろ帰つてきた。敏生を案内して三階に。二人つきりになったところで敏生。切ない気持ちにこらえきれず、彼女の手をぎゅつと握る。一目惚れのこと、片思いのつらさなど、さまざまに思いが堰を切つたように彼の口から流れ出た。

「いやとは言わせない口上手」だったと敏生夫人は笑いながら、その時の敏生を形容する。

その夜は星影のきらめく愛河のほつりを二人で散歩。十二時を少し回った頃、彼女を家に送りどけた。敏生は去りがたい気持を残して、その晩は旅館に泊まった。

翌日の朝早く、秀卿から電話があった。昨夜、帰宅が遅すぎて父親に叱られたと、涙まじりの声。それはさておき、父親が二人の結婚に反対しているという。「兄弟も皆アメリカにいるし、留学は娘にとって学問を深める最良の道。ここまで準備を進めてきたのに、今さら脇から横槍を入れられるのは迷惑。」ということらしい。

敏生は委細かまわず彼女を連れ出し、計画どおり高雄で一日遊び、その夜十時すぎの汽車で台北に帰った。

これからが敏生の一人舞台である。毎週土曜日、夜汽車で南下。日曜日の朝は秀卿とデート。そんな強行軍を二ヶ月近く続けた。秀卿の意思も定まり、その様子を見て彼女の両親も、二人の結婚を真剣に考えるようになった。敏生の生計についても、秀卿を通じて問い合わせがあった。敏生が前に持参した家の写真が、あまりにみすぼらしかったからという。

「収入は多いが、父の残した借金がある。これは兄弟が多く、教育費が嵩んだため。借金は父に代わって兄弟で返すつもり云々」を、長文八枚にしたためて包み隠さず報告したが、借金の金額七十万というのはやはり気が引けて、正直には言えず、半分をさらに若干割り引いて三十万円とした。

二人の結婚にもともと反対だった秀卿の父は、これを見えますます反対の意を固くしたようだが、敏生はマイペース。二人の婚約に吉日を選ぶと単身、李家に乗り込み、結婚を申し入れた。

李父「手紙の内容が本当だとすれば、あなたは天下第一の親孝行者ということになるが？」  
敏生「その通りです。」

李父「金持ちじゃなければ娘はやらないと言っている訳ではない。借金だらけの所へわざわざ嫁がせたくはないと言っているんだ。」

敏生（居ずまいを正して）「秀卿さんは私が必ず幸せにして見せます。」

敏生はその率直な態度で李父を口説き落とした。誠意の勝利である。

第一の難関は越えたが、次に突き当たったのは宗教問題であった。秀卿の家は敬虔なキリスト教徒。敏生の家は仏教だったから、まず結婚式のスタイルをどうするかで一悶着あった。

媒酌人を兩人ゆかりの恩師、台湾大学の韓忠謨教授にお願いすること、李父には納得してもらった。持参金、嫁入り道具の類は持たせないという李父の主張には、「秀卿をもらえるだけで十分。どっちみち金はないんだから。」と、これは敏生が理解を示した。最後まで引っかかったのは、意外に李母の方だった。「娘の嫁入りで涙するのは秀卿の時だけ。何しろ借金を抱えた家に嫁ぐのだから。」と、傍から見てもつらくなるほど心配の様子だった。

これは余談だが、娘の嫁入り先に不安のあった李父は、敏生に報告させたばかりでなく、実際、人をやって赤峰街の家作が本当に林家のものかどうか調べさせていたという。敏生が嫁取りするまでは家を売らないと頑張った父の苦心が、この時やっと分かった。しかしあの家は当時、何重にも抵当に入っていたのだが、そこまでは調べがつかなかったと見える。それは相手のうかつ。秀卿を貰ってしまえばこっちのものだ。

解せないのは敏生夫人、秀卿小姐の二年後の「心変わり」だが、これは本人に聞いてみよう。「誠意ということでしょう。敏生はあまり優しい人ではないけれど、自分の感情に正直で、しかもその感情が長続きします。好きとなったらとことん好きになって、どこまでも変わらない人ですから、女に

してみればこんな安全な人はいません。こういうところは息子たちにも真似てもらいたいと思つています。」三十年の実績か、夫人の敏生研究も堂に入っている。

## 賢妻入門

結婚前後のあの時期、敏生の財政状況はかなり逼迫していた。「三時半に間に合わせるため」奔走する毎日であつた。結婚祝いで資金繰りを、と目論んでいた敏生だったが、残金はわずかに三千元程度。日月潭でのハネムーンも、三流ホテルで経費を節約した。

ハネムーンを終えて高雄に里帰りを済ますと、敏生夫婦は台北に取つて返した。午後二時帰宅。早々に掛かつてきた電話が第一信用金庫から。今日中に五千元を振り込めという。新婚気分から一挙に現実に引き戻された敏生は、また心機一転、臨戦態勢に入った。とはいえ金はどこから？借られるところは借りつくしている。時間もない。

策に窮した敏生に、笑みを湛えた新妻が目に入った。「これしか手はない」。意を決すると行動は速い。新妻を前に財政の窮乏を懇々と説明すると、「金を回してくれないか？」。実は嫁ぐ秀卿に、李父の預けた二万元があつたのだが、これは口外無用。いざの時の準備である。秀卿も少し躊躇したが結局、全額供出してしまった。おかげで半月間、資金繰りに目処が立った。



夫人のことを尋ねられると敏生は、決まって親指を立て「太っ腹！」と第一声。改めて感心するよ  
うな様子をする。林家に嫁いだ最初の十年、負債の数々に扶養家族、最後に残った赤峰街の家まで手  
放し、一家十六人は三十数坪の狭い家に移り住むことになるが、夫人は不平一つこぼしたことがない。  
いろいろ言いたいことはあったはずだが。負債の返済についても、兄弟の収入を合わせた額の四、五  
倍を稼いでいた敏生が、実質的にはほとんど返済を負担していたし、両親と同居するということが長  
兄の名義で買った家も資金の半分は敏生が出している。そればかりか、末弟を可愛がる母の願いを叶  
えたいがために、自分の家もないのに、末弟の家の頭金を払うようなこともあった。話せばいろいろ  
と紆余曲折があるのだがすべてを知って知らぬふり、夫人が口を挟んだことはない。また、狭い家の  
中で衝突もない訳ではなかったが、気分転換の散歩から帰ってくると、いつもあつけらかんとしてい  
る。

こんな夫人の功勞に報いるため敏生は、かねてからの念願であったアメリカ留学に送り出す。五ヶ  
月の研修。すでに三児の母だった。

物分かりがよく旦那の行動に干渉しない。帰宅が毎晩十一時、十二時という時期もあったが、夫人  
はまったく気にしない。たまに早く帰ってくると「仕事がうまく行っていないの？」と逆に心配され  
る。

アメリカ留学は教職を辞めて行ったものだが、帰ってくると夫人はまた働きたい、今度は敏生の特  
許事務所で、と言い出した。「夫婦で同じ職場」に難色を示した敏生が条件を提示。意外にも夫人は  
すんなり条件を飲んで特許事務所に、国外商標案件の処理を担当。四年間勤めた。ちなみにその条件  
とは、

一、出勤退勤は別々。一般職員と同じ勤務時間遵守。

二、勤務時間中は所長室立ち入り禁止。

三、帰宅後、会社人事に容喙しない。

夫人はとても協力的に、ほとんどの条件を厳しく遵守したが、第三の条件は生活の領域に絡んでくるので、なかなか難しいところもあった。

李秀卿はほがらかで明るい性格。しかも台大法科出身。将来は法律か政治の分野で活躍するものと彼女の兄弟たちは誰もが期待していた。それが敏生のために留学の機会を放棄。妻となつてからは夫を立てる賢夫人。予期しない結果となつた。

特許事務所に勤めてから数年後、夫人の首にでき物が。初診の見立ては癌。これには仰天の敏生。さつそく主治医の診察所へ連れていき確認。診断書を書き終わつた医者と同じ向き合い敏生と夫人は、死刑判決を聞くような気持だつた。「癌ではありません。」のひと言によろやく胸をなでおろす。

この事件をきっかけに夫人は仕事をやめた。その後は家事を取りしきるかたわら、ゴルフで勇名を馳せることになる。「ゴルフ場にいる時は、これが女かと思うくらい弱々しさを感ぜない。あだ名は女ターザン。あそこでは私のほうが小さくなつてゐる。」

十年の辛酸を嘗めてよろやく余裕が出てきた今日この頃、夫人の心配事は、「年を取るごとに休まなくなる」仕事魔敏生の健康のこと。

この妻に、「一生の感謝」を捧げたい気持の敏生である。

敏生と秀卿の間には、志剛、志青と志洋、三人の息子がいる。志剛は輔仁大学法科卒、英語、日本語とも達者。一九九二年に弁護士資格取得。台湾国際特許法律事務所の次世代の後継者として大きな

期待が寄せられている。志青は東海大学コンピューター学科卒、現在、米ニューヨーク市立大学在学。志洋は輔仁大学電機科出身、米シラキウス大学修士。台湾国際特許界に特許新製品を解析する専門技術者が必要とされる現状から、兄弟三人とも事務所での勤務経験がある。

所長の息子とはいいいながら特別扱いはされない。いや、かえってそれが三人には大きなプレッシャーとなつて、人一倍努力している。これは事務所の同僚の誰もが認めるところである。

敏生の子女教育は「雑草教育」。雑草のような強い子に育ててほしいという願いから、甘やかしはなかつた。「学校の送り迎えもしたことはない。何でも母親と相談し、大事なことは全員で決める」。

一九九四年五月、仕事で日本に赴いた敏生夫婦は、長男の志剛を訪ねる。志剛はソニー本社の法律業務関係のセクションで働いている。言葉の問題もなく、日本での生活は水を得た魚のように生き生きとしている。一人住まいのマンション。志剛は、伸びすぎた父親の髪を見て、にわか床屋に早変わり、手慣れた手つきで鋏を入れる。母親には、途中デパートに立ち寄り、あれこれ迷った挙句、絹のスカーフをプレゼント。夫人の喜ぶ様子に、敏生も傍らで、目を細める。志剛は夫婦の秘蔵子である。志剛が散髪しているちようどその時、電話のベルが鳴った。アメリカに留学している志青からの国際電話だった。「母の日おめでとう！」と、これは母親に。敏生、志剛も電話をとって、一家四人が代わるがわるに近況を報告しあう。話は台北で飼っている愛犬「リト」のことにまで及んで、とりとめがない。ようやく高い電話料金に思い当たって受話器を置く。敏生一家はいつも和気藹々である。今も特許事務所に勤務しているのは、末っ子の志洋一人。机の上はいつも資料の山。毎晩夜遅くまで、彼もまた敏生の血を継いだ頑張り屋さんである。

台湾国際特許法律事務所は敏生の家。次の世代にも受け継いでほしい。しかし、友情の絆で結ばれ

た日本と、特許業界にしっかりと根を張った台湾の業務を受け継ぐのは容易なことではない。市場を熟知し運営のこつを把握した者でなければ、事務所の鍵は預けられない。志剛が今、市場の現場でそれを模索しているところだ。

家族は敏生の宝。こんな素晴らしい家族を与えてくれた神に、感謝の気持でいっぱいである。